

東京藝術大学 奏楽堂 モーニング・コンサート Morning Concert

第 6 回

2026年 7 月 2 日(木)

指揮：山下一史

藝大フィルハーモニア管弦楽団

山田雄万（ヴァイオリン）

モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調 K.219

岡田芳樹（ピアノ）

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18

19：45開演 東京藝術大学音楽学部第6ホール

主催：東京藝術大学音楽学部・東京藝術大学演奏芸術センター

◆山田雄万（4年：ヴァイオリン）YAMADA Yuma

モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調 K.219（演奏時間約30分）

第70回全日本学生音楽コンクールにて横浜市民賞(聴衆賞)受賞。

東京藝大ジュニア・アカデミー修了。在籍中、奏楽堂ドリームコンサート2017にて藝大フィルと共演。

同年、横浜交響楽団と共演。

第7回彩の国コンペティション最優秀賞受賞。

2024年第29回おきでんシュガーホール新人演奏会オーディションにてグランプリ受賞。

2025年さがみはらフィルハーモニー管弦楽団と共演。

学内選抜による「藝大定期室内楽」第52回に出演。

これまでに岡山潔、服部芳子、漆原朝子、植村太郎、山崎貴子、堀正文、玉井菜採、渡辺玲子の各氏に師事。

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、現在、東京藝術大学4年在学中。



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）は、18世紀後半（古典派時代）に大活躍したオーストリアの歴史的作曲家である。35年という短い生涯の中で、交響曲、オペラ、協奏曲などあらゆるジャンルで600曲以上の名曲を残した音楽の神童である。

モーツァルトの『ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調 K.219（トルコ風）』は、彼が残した5曲のヴァイオリン協奏曲の最後を飾る最高傑作である。この曲は、緻密な構成、技巧性、歌心、劇的要素が最もバランス良く表されており、「優雅さ」「軽やかさ」「遊び心」これら全てを併せ持った品格に溢れるモーツァルトの代表作となっている。

第1楽章 Allegro aperto

オーケストラが華やかに主題を演奏した後、独奏ヴァイオリンが全く異なる遅いテンポ（アダージョ）で、まるで夢を見るように優美に登場する。この「テンポを急に落としてソロが入る」という構造は当時の協奏曲の常識を覆す異例の演出であった。「aperto」は「堂々と、開放的に」という意味で、モーツァルトがこの時期に気に入って使っていた独特な発想標語である。協奏風ソナタ形式の中で、華やかで優雅なモーツァルトらしさが存分に発揮された楽章である。

第2楽章 Adagio

モーツァルトが書いた全ヴァイオリン曲の中でも、最も美しく抒情的な楽章の一つで、ヴァイオリンの旋律は柔らかく、聴く人の心に語りかけるような優しさと、静かな祈りを感じる。1・3楽章の快活さと対比を持って、暖かな光を纏ったこのアダージョはなんと詩的な美しさなのだろう。

第3楽章 Rondo:Tempo di Minuetto

基本はフランス風の優雅なメヌエットだが、中盤で突然テンポと調性が変わり、荒々しい「トルコ風音楽」へと変貌する。作曲当時19歳だったモーツァルトの、地元ザルツブルク宮廷での退屈な日常を打破したいという想いがこの作品からは感じられ、「上品なメロディを突然荒々しい口調にして驚かせてやろう」というおちゃめな反抗心を当時流行りのトルコのメフテル（軍楽隊）のエキゾチックな響きに乗せて昇華させた。

トルコ軍楽隊の大太鼓の響きを再現するため、低弦楽器に特殊奏法のコル・レーニョが指示されており、当時の聴衆を大いに驚かせた。最後は激しさを残さず、最初の上品なメヌエットが静かに消え入るように曲を閉じる。

本日はモーニング・コンサートにお越しいただき誠にありがとうございます。モーツァルトのヴァイオリン協奏曲をオーケストラと弾きたいという夢が叶い、本当に嬉しいです。指揮の山下一史先生、藝大フィルハーモニア管弦楽団の皆様、いつも温かくご指導下さる先生方、この演奏会のためにご尽力いただいたスタッフの皆様、これまで支えてくださった全ての方々へ心から感謝申し上げます。

（山田 記）

◆岡田芳樹（3年：ピアノ）OKADA Yoshiki

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18（演奏時間約34分）

神奈川県出身。4歳よりヤマハ音楽教室に在籍。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て同大学音楽学部3年在学中。

在学中に藝大クラヴィーア賞を受賞。第32回かながわ音楽コンクールユースピアノ部門小学校中学年の部 最優秀賞・中田喜直賞・神奈川トヨタ賞受賞。

第41、42回ピティナ・ピアノコンペティション全国決勝大会C級銀賞・D級ベスト賞受賞。第8回ソナタコンクールソナタ単楽章部門金賞受賞。

第11回東京国際ピアノコンクール大学1年生部門第2位。

これまでに、有森博、池長理恵、菅原望、務川慧悟の各氏に師事。



セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は、ロシア出身の作曲家・ピアニスト・指揮者である。彼の作品は、ピアノ曲、協奏曲、交響曲、声楽曲など幅広いジャンルにわたる。一方で、彼は世代を代表する名ピアニストとしても活躍し、自作自演録音は20世紀初頭の演奏様式を知る上で重要な資料となっている。

ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18（1900年～1901年作曲）

この作品は、作曲家ラフマニノフの名声を決定づけた代表作であると同時に、ロシア音楽における後期ロマン主義の到達点の一つとして位置づけられる作品である。1897年、交響曲第1番の初演失敗により神経衰弱に陥ったラフマニノフは、自信と創作意欲を喪失してしまう。そんな中、精神科医ニコライ・ダーリの催眠療法を経て徐々に自信を回復し、本作を書き上げた。この経緯から、本作は献辞においてダーリへ捧げられている。そして、1901年11月にラフマニノフ自身の独奏により初演され、大成功を収めた。以後、本作はピアノ協奏曲の代表作として現在に至るまで演奏され続けている。

第1楽章 Moderato

ソナタ形式。ピアノが独奏で、ロシア正教会の鐘を思わせる和音を打ち鳴らして始まる。響きは徐々に厚みを増していき、頂点でオーケストラにより第1主題が提示される。ピアノはその間、分散和音によるオブリガートを奏している。このようなオブリガートは作品を通して見られ、ロシア正教会のいくつもの鐘が絢爛に鳴り響く様子を表しているようにも感じられる。第2主題はそれまでとは対照的に、甘美な旋律がピアノで奏でられる。展開部は、オーケストラとピアノが密接に絡み合いながら、燃え上がるようなクライマックスへと向かっていく。

第2楽章 Adagio sostenuto

ホ長調の静謐な音楽。オーケストラによる4小節間の弦楽合奏が、性質の異なる2つの楽章を見事に結びつけている。その後、ピアノの穏やかな伴奏に導かれるようにしてフルートの甘美な旋律が現れる。この旋律は様々な楽器に受け継がれながら続いていく。中間部では壮大に音楽が展開されるが、最終的には再び静寂へと回帰する。

第3楽章 Allegro scherzando

前楽章を受け継ぐホ長調が始まるが、転調を繰り返しながらハ短調へと向かい、カデンツァへ受け継がれる。グリッサンドのように鍵盤上を駆け巡るカデンツァは、ピアニストとしてピアノの演奏効果を熟知していたラフマニノフだからこそ書き得たものであろう。第1主題は、ピアノの超絶技巧にオーケストラが伴う形でリズムカルに音楽が進んでいく。第2主題はオーケストラで奏でられた後ピアノに受け継がれ、長大なフレーズ感で歌われる。その後は他の楽章の動機を用いながら自由に音楽を発展させ、力強いトゥッティにより曲を締める。

最後になりましたが、本日はモーニング・コンサートにお越しいただき誠にありがとうございました。指揮の山下一史先生、藝大フィルハーモニア管弦楽団の皆様、いつも温かくご指導くださる有森博先生、そして本公演開催にご尽力いただきました演奏企画室の皆様、スタッフの皆様に、心より感謝申し上げます。

（岡田 記）



©ai ueda

1977年桐朋学園高校音楽科に入学。チェロを井上頼豊氏に、指揮を尾高忠明、小澤征爾、秋山和慶、森正の各氏に師事。1984年桐朋学園大学を卒業後、ベルリン芸術大学に留学。1986年ニコライ・マルコ国際指揮者コンクールで優勝。1985年12月からカラヤンが亡くなる1989年まで彼のアシスタントを務めた。1986年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会で、急病のカラヤンの代役として急遽ジーンズ姿のまま「第九」を指揮し、話題となる。以来、ザルツブルク・フィングステン音楽祭でカラヤンのスタンバイ指揮者として契約。その後、ヘルシンボリ交響楽団（スウェーデン）の首席客演指揮者を務めた。日本国内では1988年にNHK交響楽団を指揮してデビュー。オーケストラ・アンサンブル金沢プリンシパル・ゲスト・コンダクター、九州交響楽団常任指揮者、大阪音大ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団常任指揮者、仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者、同団正指揮者を歴任。また、東京藝術大学音楽学部指揮科教授として後進の育成にも心血を注ぐ。千葉交響楽団音楽監督、愛知室内オーケストラ音楽監督、大阪交響楽団常任指揮者。大阪音大ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団名誉指揮者。

管弦楽：藝大フィルハーモニア管弦楽団 The Geidai Philharmonia Orchestra, Tokyo

藝大フィルハーモニア管弦楽団（2016年秋、「藝大フィルハーモニア」から改称）は東京藝術大学に所属するプロフェッショナル・オーケストラで、定期演奏会のほか、声楽科との「合唱定期」、オペラ専攻との「オペラ定期」、音楽学部の「新卒業生紹介演奏会」、年末恒例の「チャリティーコンサート メサイア」（朝日新聞厚生文化事業団・朝日新聞社主催）、「台東第九公演」などを行なっている。教育面では、器楽科・声楽科学生との協奏曲等の共演および作曲科学生の作品披露を行う「モーニング・コンサート」（年13回）や、指揮科学生との演奏会・試験・演習、東京藝大ジュニア・アカデミーの生徒との協奏曲の共演などを通して、学生の演奏経験の拡充に資している。学外での活動も積極的に行なっており、近年では、新国立劇場での「世界若手オペラ歌手ガラコンサート」や現代舞踊名作劇場（現代舞踊協会）の出演をはじめ、長崎県五島市、新潟県長岡市、新潟県魚沼市、秋田県秋田市、茨城県取手市でも公演を行い、いずれも好評を博した。海外では、2017年6月のチリでの4公演（日本・チリ修好120周年記念）に続き、2023年12月には、世界三大劇場の一つであるアルゼンチンのコロソ劇場（Teatro Colón）からの招聘による公演で聴衆を魅了し、15分以上に及ぶスタンディングオベーションを受けた。また2024年12月には、ヴァイオリンの巨匠ジェラルド・プーレ氏と共に、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲のCD録音を実施した。（公社）日本オーケストラ連盟準会員。



ソロ・コンサートマスター
植村 太郎

コンサートマスター
澤 亜樹
對馬 佳祐 ◎

第1ヴァイオリン
荒井 友美
生田 絵美
加藤 えりな
金子 芳子
河野 由里恵
佐原 敦子
菅谷 早葉
西田 史朗
前田 奈緒
増尾 朗子
相原 千興 *
田中 李々 *
丸山 千聡 *
木村 碧 ◆
佐藤 文香 ◆

第2ヴァイオリン
村津 瑠紀 ○
山本 有紗 ○
清岡 優子
小暮 莉加
小杉 結
野田 良子
福井 彩花
福岡 雄也
マヤ・フレーザー
宮本 有里
加藤 綺乃 *
倉沢 茉紘 ◆

ヴィオラ

安藤 裕子 ○
吉田 篤 ○
阿部 哲
相岡 弥生
中川 玲美子
麻柄 明日香
森 朱理
藤原 歌花 *
中島 久美 *
難波 洸 ◆

チェロ

羽川 真介 ○
山澤 慧 ○
寺井 創
豊田 庄吾
夏秋 裕一
松本 卓以
加藤 菜生 *

コントラバス

赤池 光治 ○
長坂 美玖 ○
倉持 敦
小室 昌広

フルート

細川 愛梨
山本 葵
石田 みそら *

オーボエ

戸田 智子
山田 涼子

クラリネット

濱崎 由紀
春田 傑

ファゴット

坪井 祐樹
宮崎 寿理
山崎 奏羽 ◆

ホルン

谷 ひな子 ○
岡村 陽
堂山 敦史
梁川 笑里

トランペット

平山 あかり
星野 朱音

トロンボーン

東川 暁洋
久保田 和弥
鶴田 陸 *

テューバ

田村 優弥 *

ティンパニ&パーカッション

井手上 達
ニツ木 千由紀
本間 達也 *
宮垣 輝希 ◆

楽団長

福中 冬子

事務局長

酒井 敦

事務局次長

小宮 山雄太（チーフ・ステージマネージャー）
小久保 綾子（チーフ・ライブラリアン）

スタッフ

葛谷 拓摩（インスペクター）
成迫 萌桜（インスペクター補佐）
森本 直通（ステージマネージャー）
徳永 芽久（アシスタント・ステージマネージャー）
神山 巧弥（ステージスタッフ）
中村 淳（ステージスタッフ）
安田 沙織（ライブラリー）
廣田 碧（ライブラリー）
小林 世佳（ライブラリー）
山田 大（広報強化）
足立 優司（演奏活動強化）
野村 智行（庶務）
松井 勝幸（会計）

◎：コンサートマスター
（本公演）
○：首席奏者
＊：賛助出演
◆：本学学生

発行：2026年7月2日(木) 東京藝術大学
編集：東京藝術大学音楽学部
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
お問い合わせ：東京藝術大学演奏芸術センター
TEL 050-5525-2300
※無断転載・複写・引用などを禁じます